

新刊紹介

尊經閣本冥報記

粘帖綴一冊

本書は唐の吏部尙書臨なるもの、撰述したものであり、支那南北朝時代から唐初にかけての佛教に關する因果應報譚や靈驗譚等を収録したものであつて、彼地に於て流布し、後出の類書に幾多の影響を及ぼしたことは言ふまでもないが、我國にも亦早く傳來し世に行はれた様である。冥報記の名稱は藤原佐世撰する所の日本國現在書目にも見えてゐるのみならず、已に早く、弘仁年中藥師寺の僧景戒撰述せりと云はれてゐる日本靈異記、上卷序文の、その撰述の由來を記してゐるところに「昔漢地造冥報記大唐作般若檢記何唯慎乎他國傳錄弗信恐乎自主奇事專起自囑之不得忍寢居心思之不能默然故聊註側聞號曰日本國現報善惡靈異記作上中下三卷」と其の名が見えてゐる。本部佛教說話の鼻祖とも云ふべき日本靈異記がこの冥報記等を藍本として成立したと云ふことは深い興味を起させる。のみならず本書は撰述された彼地に於ては已に佚亡して傳はらず、流傳の地たる本邦にその跡を保つてゐたのも奇しい。唯僅かに西域燉煌に於

て佛人ペリオが之を發見したる由を傳聞するがその如何なるものかはまだ判らない。又、清人楊守敬はその日本訪書志に、「余于日本得古鈔本三卷首題吏部尙書唐臨撰有臨自序上卷十一條中卷十一條下卷十六條相傳是三緣山寺保元間寫本首鈔四十三行以高山寺藏本補之」と冥報記について述べてゐるが、これ亦その如何なるものかは明確でない。従つて現在その傳本の明かなるものは洛西榎尾の高山寺本及前田家のこの尊經閣本の二本に過ぎない様である。高山寺本は明治廿二年國寶に指定せられ次いで四十三年玻璃版で印行されて世に弘まつたのである。尤もこれより先、明治廿五年に川田氏によつて上卷丈けば冊子に印行されてゐた。尊經閣本は昭和十年國寶に指定されたものであり、長治二年八月十五日に書了つた旨が卷末に明記されてゐる。上、中、下三卷を合せて粘帖綴一冊としてゐる。墨付上卷十六枚、中卷二十九枚、下卷三十一枚、合せて七十六枚大きき縦約八寸、横約五寸その各の表裏に一面七行、一行約二十字前後、行書を以つて記るされてゐる。全文に互つて朱墨を以て乎古止點を附し、片假名を以つて傍訓を施し、釋文し、或は時に返り點の記るされてゐる所もある。又、極めて僅かではあるが黒墨にて間々傍訓する所もある。是等は何時施されたとも判明し難いが、その片假名の字體に於ても、或は返り點の施し方其の他についても比較的古體を存してゐるものと考へられる。又、本書は異本との校合を行つたことを示してゐるが、その校合し、差異を示せる箇所を高山寺本と比較するに高山寺本とは

又その所傳を異にする様である。更には高山寺の不備を補ふべき箇所も存するものゝ如くであつて冥報記の研究には兩者必ず對比すべきものであらう。尊經閣本の印行によつてこゝに初めて兩者共に比較的容易に對照し研究するを得るに至つたのは慶賀の至りである。(非賣)(A)

燉煌畫の研究

圖像篇一冊
附圖一冊

松本 榮一 著

圖像篇(四六倍版)八一五頁、附圖(菊倍版)二二四葉、二冊の尅大なる著作である。漢代以來の地名である燉煌の名も今世紀初頭に於ける Stein, Pelliot 兩氏等のこの地に於ける夥しき遺物の發見によつて一躍學界の寵兒となつた。燉煌の風は一時東洋學界を席卷したものであり、この地より世界各國へ齎らされた数多き古書その他の遺物は東洋文化再認識への不可欠なる資料である。且其等に就ての研究も今迄著々と進められたのであるがなほ今後に残された課題は決して少くなく、幾多の驚異を含むしてゐるであらう。燉煌千佛洞の壁畫及びこの地出土の絹・麻・紙に畫かれた繪畫即ち總じて燉煌畫の研究に就ても泰西の學者によつてなされた報告論文は決して二、三にしてとゞまらず、殊に Saindia には可なり細詳なる解説あるも、未だ體系的なる著作あるを聞かない。然るに本書こゝに成つて燉煌畫の整理説明が體系附けられたことは我國學界の進歩であり喜びであ

る。圖像篇内容目次の如し。序説、第一章燉煌畫に於ける各種變相の研究・第二章佛傳圖及本生圖・第三章尊像圖中の特殊なるものに關する研究・第四章羅漢及高僧圖・第五章密教圖像の研究其二曼荼羅及壇樣圖・第六章同其三種尊像・第七章同其三護符印契圖其他・第八章外教圖。内容一々の紹介は之を略するが、著者は歐洲各地に遊びて根本的資料實物の調査に従ひ以て得たる豊富なる知識によつて研究を進められたものであり、且文獻も普く涉獵され、殊に佛教經典に就ても相當に典據を擧げられてゐる。書中散見する挿圖一九八葉は以て所旨を鮮かに證するとともに讀者の眼を樂ましむるに足る。豪華なる附圖一冊は鮮明なる圖版に滿され、世界各地に散在する實物を充分に髣髴せしめて餘すところがない。著者の資料蒐集に於ける勞蓋甚大なるものがある。なほ燉煌畫中その殆んど全部を占むるものは佛教畫である。東洋文化の中心となりし佛教の偉大さは亦この方面に於ても明確に看取される。(東方文化學院東京研究所發行・價二五圓)——(野上)

——北齊時代の石窟寺院——

響堂山石窟

東方文化學院京都研究所

水野 清一 共著
長廣 敏雄 著

河北・河南兩境に跨る響堂山は山西の大同・天龍山、河南の

龍門と共に支那佛教美術の淵藪である。而してこの地の石窟石佛に關する紹介報告は既に常盤博士・櫻井一郎氏等によつて先鞭を著けられてゐるが此等は極めて斷片的なるものによらず、佛教美術史上優秀なる材料を提供するこの地の研究は比較的に等閑に附せられてゐたのである。然るに民國十九年顧燮光氏によつて「河朔訪古新録」が著はされて特に世人の注意を惹き、一昨々年には北平研究院の徐旭生氏等によつて更に精緻なる調査が進められ、その成果の一部は「南北響堂寺及其附近石刻目錄」となつて公表されてゐる。かくの如き民國學者の活動に呼應して行はれたのが著者水野・長廣兩氏の研究調査であり、本書又その輝しき記念物である。

本書は三編より成る。第一編南響堂山石窟、第二編北響堂山石窟・第三編響堂山北齊石窟論である。第一編に於ては先づ最初に調査小記として昭和十一年春著者等の一行がこの地へ研究調査の旅行をされた概況が記され、次で響堂寺特に石窟の考古學的調査が精細に述べられてゐる。第二編には同じき論法にて北響堂山に關せる調査小記・常樂寺・石窟が順次説明され、第三編が結論的に響堂山北齊石窟論をその構造、造像、裝飾の各方面より細論してその有する特徴を拾ひ該石窟の重要性を論證されてゐる。本文九十五頁。次いで響堂山彫刻零拾・響堂山附近の歴史地理・響堂山石刻目、の三編が附録として收めてあり、廣く海外にも資料を覓めて後の研究者の參攷に供せられしこと等は著者の用意周到さを示すものである。なほ書中常に散

見する寫真圖版・卷末に附せられた窟全景より細部に互る鮮明なる寫眞及び紋様を示す拓本等六十六葉は讀者をして益々興味深きを覺えしむるものがある。響堂山石窟を各方面から全體的に眼前に浮現せしめられた著者の學的功績没すべからざるものである。(四六倍版、價五圓) (野上)

世親唯識説の根本的研究

稻津 紀三著

この書は氏が嘗て「宗教研究」「哲學研究」「大谷學報」等に發表された世親唯識説に關する諸論文に新に筆を入れて輯録し一書とされたものである。

世親の教學が今日に傳へられてゐるのは、著者がこの書の序に述べてゐられる如く大別して二つの系統に依つてである。一つはその唯識三十論頌を中心し玄奘が再組織して「成唯識論」と名附けたものを慈恩が祖述して興り、我邦には奈良朝に將來された「法相宗」の系統であり、他は「無量壽經優婆塞」に註した曇鸞の宗教體驗が法然・親鸞に依つて再現せられた「浄土門」の系統である。前の法相宗は世親の三十頌に依るものと言へ、その註疏たる成唯識論は所謂十大論師の所説を合糅したもので特に護法の説を正義として立てたのであるから其處には世親自身の思想と異つた爽雜物の存する事は否めない。随つて成唯識論のみに依る限り世親その人の思想を完全に再認する事は不可

能であつた。所が一九二二年、シルヴァン・レヴィ教授の梵本發見を一契機として法相宗義から離れて歪曲された型をもとに還し新しく世親教學を理解し直さうとする氣運が生じたのである。その結果世親の思想は瑜伽唯識の名に依つて統べられるに至つた。これは世親の思想方面のみに關しての研究の成果なのであるが著者は更に進んでその信仰的方面にも着目し、この兩者を統合して世親その人を全人的に把握しようと思圖せられるのである。かゝる試みの一つとしし著者は世親の阿賴耶識說を宗教的衆生觀として理解しその中に淨土教の信仰の要素の多分に含まれてゐることを論證せられるものである。阿賴耶識は衆生的意識界の根元と觀られるがそれは單なる世界の説明の原理ではなく「自己に於て眞實に存在する所の自己そのものゝ見出されたものである。」それは阿毘達磨の意識論に於ける「煩惱等善惡の感情の起源の説明せられざりしこと」對象化された所取の意識が考へられてゐるのみで對象化されざる能取の意識——意識する意識——が觀られてゐないこと」等の欠點を補ふものとして、煩惱等の不淨法の起源は阿賴耶識中に求められ意識する意識として染汚の末那が立てられるのである。是れは單に思惟に依つて構成されたものではない。實際經驗を如實に内省するならば、あらゆる六識を覆うて遍在する實在意識なることが見出される。そしてかゝる自己意識と俱なる思惟作用の遍在の識は「一轉してその自己意識に於て己れを對象化してゐる根元識の包藏的存在性に氣附くことが出来るであらう。これが藏識と

譯される阿賴耶識を觀る立場は即ち後得智の立場であつてそれは「煩惱具足のわれらは何れの行にても生死を離るることあるべからざるを……」と信知される眞宗の「機の深信」と本質を同じうする。所でかゝる阿賴耶識の本質は「一切種子を持つこと」と「異熟」なることであるが前の觀念は阿賴耶識が現實の根元として見られてゐる意味をあらはし、後の觀念は更にこのやうな根元を成立せしめし因縁——業熏習・分別熏習——をあらはしてゐる。そして前者は後者の中に包攝せられ阿賴耶識は「宿業の熏習の異熟として變成せるもの」である。それは又異熟せる果報なるが故に「無覆無記」であると言はれる。即ち善惡の價值批判は果報を招く因たる業煩惱のみに關するものであつて果については「憐愍があるか隨喜があるかより他はない。世には善人も惡人もあるが之を根本人間性(阿賴耶)に還元して考へれば皆煩惱具足の凡夫である。このやうに阿賴耶を價值批判の外に置いたのは「佛の平等大悲のうへからの衆生觀であらねばならない」からである。

上來阿賴耶識說に對する著者の理解を簡單に紹介したのであるが、かゝる「宗教的衆生觀としての阿賴耶識說」がこの書全編を貫く精神である。かゝる考方が直ちに著者の意圖する世親の思想的方面と信仰的方面との統一を全からしめるか否かに就ては一概に言へないであらうが、とにかく阿賴耶識說がたゞ單なる理論的體系ではなく宗教的のものであることを明かにされたといふ事のみでも充分傾聴に價する。勿論著者は世親の思想と

信仰との統一のためには単に之のみでなく攝論及其の釋を參考しての唯識二論の轉依の體驗や十地經の初歡喜地所説の宗教經驗等に就て論じてゐられるのであるが、私はこの阿頼耶識説に關する著者の理解のみでもこの書の新に世に出づる意義は完全に果されてゐると思ふのである。因にこの書に收められた論文は左の五項目である。

- 第一 世親の唯識説に於ける「識」と「境」の概念
 - 第二 十地經初歡喜地に説かれたる宗教體驗と發心の意義
 - 第三 世親の唯識二論の根柢をなす轉依の體驗と其れに基くものとしての二論の理解
 - 第四 轉依の證悟を顯す世親唯識説の體系
 - 第五 梵文唯識二十論和釋並びに註解
- (昭和十二年八月・大東出版社・菊版二七二頁二・八〇)

「眞宗學概論」

禿 詠 住著

眞宗學とは何ぞやと云ふ宿題に對して『行信の體系的研究』によつて眞宗學の體系化を試みられし著者は更に『眞宗學概論』を公にせられた。先づ本書の内容は次の如くである。

序 説

第一編 教判論

第一章 教判論の諸問題

- 一、教判の概念。二、眞宗學の史觀。三、眞宗學の領域。四、眞宗學の組織。

第二章 教判論の進展過程。

- 一、教判論の概觀。二、三心釋への關心。三、廢立より隱顯へ。四、隱顯釋の成立根據。五、淨土異流の三心觀。六、信樂の論證。

第三章 七祖教學の成立

- 一、相承の擴充。二、『選擇集』の檢討。三、『淨土論』『論註』の檢討。

第四章 『教行信證』の組織。

- 一、題號の問題。二、題號と組織の關係。三、行卷の研究。四、組織と展開。

第二編 教理論

第一章 教理論の基本問題

- 一、眞宗學の本願論。二、眞宗學の他力論。三、眞宗學の廻向論。

第二章 教理論の機構。

- 一、『教行信證』の概觀。二、往還二廻向に就いて。三、淨土の問題。

第三章 教行信證の四法に就いて

- 一、眞實教の内容。二、眞實行の内容。三、眞實信の内容。四、眞實證の内容。

第四章 願生と淨土。

一、願生の意義。二、眞宗學の淨土觀。三、佛身の問題
先づ第一編、教判論の内容を序によつて見るに「眞宗學が宗祖親鸞に於て、如何に構成せられ組織せらるゝに至つたかと云ふその成立の過程に於ける己證の論理的展開を、宗祖に見らるる求道の歷程、信境の展開に跡づけ」てゐる。又第二編の教理論に於ては「此の過程の基礎付けを通じて方法的に論攷せられた佛教觀の理解を體系的に考察」してゐるのである。それは約言すれば、

(一) 眞宗學の構成過程

(二) 眞宗學の展開論理

の經緯によつて眞宗學を體系的に論ぜんとせられしものである。然るにこの兩面の考察は宗祖親鸞の著『教行信證』をその成立過程の考察と、論理的展開を窺ふことに外ならずとなし、前者を『教行信證』の逆觀、後者をその順觀と名けられてゐる。斯くして『眞宗學概論』は宗祖親鸞の『教行信證』の顯眞せんとする眞理内容として承認せんとする立場から上述の如き方法のもとにその優れた佛教觀としての特徴を體系的に概論すること、なるであらう」と言はれてゐる。

東京市本郷區、帝國大學赤門前、山喜房佛書林發行・壹圓五拾錢、(GK)

フ イ ヒ テ

一四六

木村素衛著

本書は弘文堂の西哲書叢書第十六編である。本叢書は元來夫々の哲學者の傳記と全學說とを成べく平易に叙述する使命をもつものであるが、本書は種々の事情のために「本叢書の建前とは全然別の意圖の下に」書かれてゐる。即ち本書はフイヒテの傳記には全く觸れず、その全學說に及んでもぬない。本書はフイヒテの初期—エーナ期の知識學に對する基礎的研究であり、従つてフイヒテ哲學の全般的研究に對する序論の役をなすものと云はれてゐる。しかこのことは云ふまでもなく本書の學術的價值をいささかも低下するものではない。また本書は決して平易に叙述せられてゐるとも云へない。といふのはフイヒテ哲學の基礎構造を特に明確に刻み出すべく、分析のメスは鋭く克明に、時には執拗に感ぜられる程に、問題を剔出し解明しつつ進められてゐるからである。單にこれらのことによつても本書が如何なる性質のものであり、また如何なる學的態度で書かれたものであるかは容易に想像せられるであらう、が本書の概要を知るためにまづその目次を示せば次の如くである。

序

第一章 知識學の本質

第二章 第一根本命題の検討

第三章 第二根本命題の検討

第四章 第三根本命題の検討

第五章 理論的自我と實踐的自我と絶對的自我との體系的連關

第六章 カント哲學に對するフイヒテ哲學の問題史的連關

ところで本書内容の要は自序に明示せられてゐる。即ち「知識學とは如何なる學問であるかの解釋的究明」が第一章であり、その結果は「それが自覺的存在者の一つの存在論に他ならぬい」ことである。さうしてフイヒテ自身は「カント哲學の繼承者たることを自認しつつ、しかもカントに於て全然缺けてゐる一つの重大事項として」かかる「存在論の體系的展開を要求した」が故に、本書は二つの焦點——「自覺的存在論の體系的基礎構造」の鮮明と「カント哲學との連關」の究明とを旨指す。とこ

ろが第一の問題のためには「この自覺的存在論が如何なる内容的本質を擔ふ」かを明かにする必要がある。そこで知識學の三つの根本命題を検討し、以てそれが「實踐的存在論」であること、及び三根本命題の相互連關の検討からその「體系的構造」を明かにした。これが第二、第三、第四の三章である。更にこれらの研究を「一層明確」に刻出したのが第五章である。さうして最後の章で第二問題が正面から取りあげられてこれに「決定的な解答」が與へられてゐる。即ち「第三批判に於ける文化の概念に於てカントとフイヒテが最も緊密に連關する」と。特に第五章の終りに於てはフイヒテの十分に考へてゐないと思はれ

二つの點、即ち第一に「實踐的存在の自覺的發動の契機である自我」について、第二に「人間的實踐の到達すべき永遠の理念として」の「絶對自我の構造契機の位置」について展望ある示唆がなされてゐる。

尙私の現在の關心からして本書の讀後感を一言附記すれば、第二、第三、第四の三章を通じてのフイヒテ的自我的究明から、フイヒテ的自我とカント的統覺、フイヒテ的自我的辯證法とヘーゲル辯證法の相違點の解明、第五章の終りに於ける、フイヒテが十分考へてゐないと思はれる問題に對する展望ある示唆、及び第六章に於けるカント哲學との問題史的連關の解明を最も興味深く讀んだことである。

× × ×

木村先生は既にカントの歴史哲學に關する二論文、フイヒテの「全知識學の基礎」等を譯出せられてゐるが、本書は先生が著書として世に問はれた最初のものである。従來我國に於けるフイヒテ哲學の研究は、カント哲學やヘーゲル哲學の研究に較べて、決して盛んであるとは云へない。従つてフイヒテ哲學に關する研究書はわが國では、寡聞な私の知る限りでは殆どないと云つてよい。かかるときに先生の學術的價値の高い本書の公にせられたことは、後進を裨益するところ多大にして、まことに學界のために慶賀にたへない。敢てこゝに一讀を望む次第である。

(四六版、本文二〇六頁、壹圓參拾錢、弘文堂發行(大友)